

世界のアフリカ化——●山口昌男

(東京外国語大学教授)

このところアフリカがあまりニュースの外報記事に載らなくなって来た。これは考えようによっては大変歓迎すべきことのようにである。20年前、つまり私がナイジェリアの大学で教えたり、調査したりしていた頃、コンゴ、ナイジェリアを始めとする諸国では、内戦たけなわで、アフリカの諸国は絶えずトップ記事を占領していた。

1960年代のはじめの独立ブームに続いて分離戦争が闘われた。時代は「トライバリズムからナショナリズムへ」が合い言葉だったが、現実には反対に細分化をたどっていた。

先日ニューヨーク州立大学バッファロー分校客員教授のピーター・エケ教授が国際交流基金の招待で訪日した。エケ教授は社会学者で「交換」という本が日本語に訳されている。エケ教授は、カリフォルニア大学バッファロー分校で学位を取得したのだが、学生のとき、現在東京大学法学部教授法社会学者の六本佳幸氏と面識があった。実をいうと六本教授は私の麻布高校教諭時代の教え子であった。25年ほど前、パークレーから日本とアフリカで教わった二人の学生が偶然出遭って同じ先生から教わったことを知って驚いたという手紙を貰ったことがある。そこで、はじめて三人が一堂に会するという愉快的時を過ごした。そのとき出た話では、エケ教授が余り優秀な成績を収めるので他のトライブ(部族)の学生のいじめに会ったということであった。

アカデミーのレヴェルでは、このような国際コミュニケーションは益々進みつつあるが、ふり返って世界情勢を見ると、部族戦争はアフリカから去り、アイルランドや中欧、ロシアの方に移ってしまったように見える。

かつての合い言葉とは反対に、今日では「FROM・NATION・TO・TRIBES」という感じである。大国は、環境問題の無かった19世紀の幻想だったのであろうか。